

教師を目指す学生のための異文化接触教育の模索

松原 真沙子

Multi-cultural Education

Masako MATSUBARA

日本の人口は2005年にすでに減少に転じた。急速に進む少子・高齢化で労働力不足が深刻になり、経済の沈下を防ぐには多数の外国人労働者を受け入れざるをえなくなることが予測される。インド人のIT技術者の存在はすでに知られているが、その他にも単純労働の領域で多くの外国人が職を得て定住している。彼らの二世たちがすでに保育所、幼稚園、小中学校に入っているのも現実であり、移民問題はアメリカやヨーロッパだけでなく、アジアの先進地域でも起こっている。これら海外の異文化接触学習の例に学びつつ、将来教育にたずさわる学生は、この問題にどう対応していったらいいかを考えてみたい。

はじめに

国連は2000年に発表した報告書で、日本が労働力人口を維持するには今後50年間毎年61万人の移民を受け入れる必要があると指摘した。⁽¹⁾ この勢いで移民が増え続ければ、日本は確実に移民大国への道を進むことになる。61万人とはいわずとも、外国人定住者がじわじわと増え続けている現実は認めないわけにはいかない。

古くは横浜の中華街や大阪の鶴橋など、華僑や在日のコミュニティーが存在しているので、日本に外国人の集住地区が全くなかったというわけではない。しかし彼らの二世、三世、さらに四世となると日本語を習得し、日本の文化にもなじんでいるので、地方選挙権など制度上の問題はさておくとして、日本社会で生きていくのにさしたる困難はない。注目しなければならない最大のグループは、日系ブラジル人（ペルーなどの南米諸国も含む）である。

1990年に日本政府が「出入国管理及び難民認定法の一部を改正する法律」を施行すると、これを契機に日系ブラジル人人口が急増した。この法律の施行によって日本国籍を持たない日系二世、三世に「定住者」の在留資格が適用されることになり、彼らに制限のない合法的就労が認められるようになったためである。南米の経済不振もあって、彼らは稼げる日本にやってきた。彼らが居を定めたのは、大工場とその関連工場がある周辺である。豊田市・豊橋市、浜松市、群馬県邑楽郡大泉町に日系ブラジル人の大コミュ

ニティーが出現していることはすでによく知られている。この現象は日本全国にじわじわと浸透しはじめている。⁽²⁾

日本の合計特殊出生率は2004年の1.29から現在は1.25まで下がった。現在も過去最低を更新中である。⁽³⁾ 日本の少子化に歯止めがかからないかぎり、外国人の増加を受け入れるをえないことは明白である。この現状を学生が理解し、実習先で、あるいは就職先で出会うであろう外国人児童生徒とかかわる技術を、海外の事例や先学の研究を参考にして考えてみたい。

1 日系ブラジル人の存在

現在の日本社会のなかで、弱者グループの一つである日系ブラジル人から始めたい。日系ブラジル人の増加の理由は先に述べたが、ではなぜ日系ブラジル人と呼ばれる人々がかくも多く存在するのかをまず学生に理解させる必要がある。かつては日本人がブラジルに移民して、そこで日本人社会をつくった。そしていまそのブラジル日本人社会から日本人が「日系ブラジル人」と呼ぶ人々が日本に来て、ブラジル人社会をつくっている。つまり移民の逆流が起こっているのである。

まず、「笠戸丸」に始まったブラジル移民の歴史から振り返ってみたい。

「1930年3月8日。神戸港は雨である。細々とけぶる春雨である。海は灰色に霞み、街も朝から夕暮れどきのように暗い。」石川達三が1935年に発表した作品「蒼氓」の書き出しである。⁽⁴⁾ 石川達三はこのブラジル移民をテーマにした小説で、第一回の芥川賞を受賞した。「蒼氓」は、日本人に移民というものの暗い部分を強く印象づけたといわれる。石川の小説が暗いのは、第一回の移民が失敗だったからである。一張羅を着込んで、意気揚々とブラジルの地に降り立った移民たちの、大いに稼いで故郷に錦を飾るという夢は、耕地に到着した第一夜から失望に変わった。住まいには水道、電気はおろか、ベッドも風呂も便所もなかった。家族全員で暗くなるまでへとへとになって働いても、コーヒの樹齢が古いため、たいした収穫にはならなかった。移民斡旋会社の多分にインチキな話に乗せられてしまったのである。しかし渡航費用など借金をして故郷を後にしてきた彼らは帰るに帰れない状態に陥っていた。この出稼ぎ移民が成功して、故郷へ錦を飾る人が多かったら、ブラジルに今日のような日系人社会は存在していなかったともいえる。日本の不況が続き、ブラジル人の人手不足が続いたこともあって、第一回移民が失敗だったにもかかわらず、その後も移民は続いた。戦前移民19万人、戦後移民6万人、総数25万人がブラジルに移り住んだ。第一回移民とともに彼らがブラジル日系人社会の構成の礎となったのである。⁽⁵⁾

日本人は持ち前の勤勉さを発揮し、二世、三世ともなるとブラジル文化にすっかり同化し、ブラジル国内にそれなりの地位を築いてきた。しかし1970年代後半、石油ショッ

クが各国の経済を直撃すると、石油の大量輸入国であるブラジルも例に漏れず、経済の破綻が刻々と進み、1980年代にはブラジル全体が貧困化してしまった。⁽⁶⁾ かくて先にも述べた日系ブラジル人の日本への逆流が始まったのである。学生は、なぜかくも多くの日系ブラジル人が日本にいるのかの歴史的背景を理解している必要がある。(笠戸丸の781人に始まって1997年には130万人余りに上り、混血も進んでいる。⁽⁷⁾)

2 ニューカマーの存在

わが国には、在日韓国・朝鮮人、在日中国人（オールドカマーと呼ばれる）など少なからぬ異民族が存在していたにもかかわらず、「単一民族国家」の神話が自明のこととされることが多く、地域社会に異文化をもった外国人は存在しないと考えられていた。しかし近年のニューカマーとしての外国人労働者、とりわけ日系ブラジル人の急増は、彼らが集住する（先に述べた豊田市・豊橋市、浜松市、群馬県大泉町）地域社会において、異文化をもった人々の存在を日本人に明確に意識させるようになった。彼らの存在は決して一時的な現象ではなく、少子・高齢社会化が進むかぎり、ますます一般化し、特定地域での集住から全国に散在するようになることは避けられないであろう。⁽⁸⁾

ここで喜多川豊宇の1993・1995年の調査⁽⁹⁾を基にした佐々木由美の研究成果⁽¹⁰⁾から日系ブラジル人の置かれている状況を考察してみたい。日系ブラジル人の約80%が「日本人からの差別や偏見」を感じると回答している。労働力としては受け入れても、「ひと」としては受け入れていない日本人の閉鎖性は大きな問題である。この閉鎖性をなくすことが小学校から社会人まで、そのレベルにかかわらず「教育」の重要な目標となろう。日系ブラジル人と共存しているかに見える大泉町の日本人を対象とした調査報告においても、彼らと話したことがある人は54%、約半数しかいない。その内訳として、56%が「挨拶をしない」、78%は「世間話をしたことがない」、82%は「親しく会話をしたことがない」と回答している。その理由として最も多いのが「積極的に知り合う機会がない」(59%)で、次が「ことばが通じないから」(28%)、「あまりかかわりたくないから」(28%)と続く。ここで明らかになるのは大泉町の共存は、かなり徹底した住み分けの上に成り立っているということである。大人の社会ではそれで機能しているとしても、子どもを巻き込む学校生活ではこの住み分けは努力して排除していかなければならない問題である。教師を目指す学生には、子どもたちが偏見をもたない人間に育つよう心して教育にあたることが求められる。

3 「ニューカマーの子どもたち」

いわゆる「ニューカマーの子どもたち」（主として南米系の子どもたちを指す）が日本の学校で置かれている状況について、太田晴雄は社会学の視点から、T市（豊田市、およ

び豊橋市を指すものと思われる) において詳細な実地検証を行っている。⁽¹¹⁾ 日本の学校には外国人の子どもも数多く在籍してきたという事実はいまさら改めて指摘するまでもないことである。これらの子どもたちのほとんどは、戦前・戦中の日本の植民地政策に起因して日本に居住することになった韓国・朝鮮の子どもたちである。しかし近年⁽¹²⁾ それまでの外国人の子どもの構成に変化をもたらす新しいカテゴリーの子どもたちが増えており、太田はこれらの子どもたちを総称して「ニューカマーの子どもたち」と呼んでいる。「ニューカマー」と呼ばれる子どもたちは、外国生まれの外国育ちで、日本の学校に編入する時点においてほとんどが日本語を話せない。韓国・朝鮮人の子どもたちは、その多くが日本で生まれ育っているがゆえに、日本の学校に通ううえで日本語に不自由することはない。大泉町の調査結果でも述べたように、大人社会において日系ブラジル人と交流しないことの理由に「ことばが通じない」があった。大人はそれですますこともできるが、一日のほとんどを学校で過ごす子どもたちには逃げ場がない。学校生活のなかで最優先すべき課題はやはり日本語の教育ということになるのは自明のことであろう。太田が実態把握に用いた1997年の文科省の調査によると、「日本語教育が必要な外国人児童生徒」の数は、小学校で12,302人、中学校で4,533人、合計16,835人となっている。内訳を見ると、南米系のポルトガル・スペイン語を母語とする集団が全体の半数を占める。子どもたちの居住地は、特定の地域に集中する傾向にあるものの、徐々に全国規模に拡大し、現在ではすべての都道府県に及んでいる。つまりどの県でも、日本語を理解できない児童生徒をかかえて悪戦苦闘しているのが実情とみてよいであろう。「ニューカマーの子ども」の比率が1割を超え、1つのクラスに10人近く在籍する学校も現れはじめている。にもかかわらず日本の公教育の場における「外国人不在意識」の支配に関する太田の指摘は興味深い。⁽¹³⁾ いまだに「単一民族」言説が根強く存在し、国際社会の場において「日本には少数民族は存在しない」という日本政府の認識が堂々と表明されている。したがって文科省の提示する学校教育も「外国人不在」を当然のこととしている。

日本人の場合、学齢期（6歳～15歳）にある子どもの親や保護者にはその子どもに義務教育を受けさせる法令上の義務があり、これによって日本人の子どもたちはこの社会で生きていく上で必要な基礎的教育を受ける権利を法的に保障されている。つまり学齢期に達した日本人の子どもは小学校に入学するのになんの問題もない。外国人の子どもの場合はどうであろうか。現行の法令上、外国人にはこのような義務は課されていない。法的には権利として義務教育が保障されていないことになる。しかし門戸が閉ざされているというわけではなく、親が求めれば行政的な手続きを踏むことによって入学は可能になる。親がその居住する地の教育委員会に子どもの就学を「希望」し、教育委員会がその申し出を「許可」することによって就学が実現する。しかし親が不法滞在者の場合は、その発覚を恐れて容易には教育委員会に子どもの入学を申し出ない。日本の学校に

入学した外国人の子どもたちは、文科省の「日本人と同様に取り扱う」という基本原則によって処遇される。外国人の子どもも日本人の子どもと同様に授業料を納めなくともよいし、教科書も無償で配布される。ここまではよい。問題は「教育内容」においても同様であるという点である。これは外国人の子どもを特別扱いせず、日本人の子どもと同じ授業を同じ方法で受けさせることを意味する。この扱いは一見よきことのように映じるが、実態は、日本語もわからず、まだ日本の学校文化にもなじんでいない外国人の子どもを日本人の子どもと同様に扱い、彼らの固有のニーズは無視されることになる。これが日本の学校の「外国人不在状況」なのである。⁽¹⁴⁾ 乱暴ともいえる方法がまかり通っているといわざるをえない。

4 『ようこそ日本の学校へ』

外国人の子どもの入学を受け入れた現場の苦闘を、文科省もさすがに放置しておくことはできず、1995年に「日本語指導が必要な外国人児童生徒の指導資料」として『ようこそほんの学校へ』⁽¹⁵⁾ が作成された。この冊子には「資料2」⁽¹⁶⁾ として外国人児童生徒受け入れ時の調査票例が添付されている。日本語にポルトガル語、中国語、スペイン語の訳がつけられているが、日本の学校に入学を希望する外国人児童生徒の母語は実に48言語に及んでいるので、冊子が作成されたこと自体は評価されても、まだまだ不十分といわざるをえない。外国人児童生徒は受け入れ校の担任から調査票用紙を渡され、これに記入し、提出する。これは強制ではなく、あくまでもより良い指導をするためのもので、協力をお願いするというかたちをとり、提出された調査票は教師の細心の注意の下に保管されることになっている。調査票でどのようなことが聞かれるのか、つまり外国人児童生徒を直接指導する教師はどのような情報を必要としているのかをみてみたい。調査票の冒頭には先に述べた調査の目的が明記されている。

A1. 児童生徒氏名 性別（男・女）

生年月日

A2. 現住所 電話番号

A3. 父親名 母親名

父親の勤務先 電話番号

母親の勤務先 電話番号

A4. 母国の住所

母国で児童生徒が通った学校名及び最終学年

A5. 日本語会話（a b c に○をつける）

児童生徒 a. 話せない, b. 少し話せる, c. 日常会話程度は話せる

- たし算, ひき算, かけ算, わり算, 分数の計算

— 6 —

日本人の児童生徒の国語指導とはまったく別物であることを明記している。⁽¹⁷⁾このような指導書ができたことは評価してよいであろう。

外国人児童生徒に日本語指導をする際の留意点として次のことがあげられている。

(1) 外国語としての日本語指導

ア) 外国語としての日本語指導

日本語の背景にある生活や文化についてもよく知らない子どもに教えるということ

イ) 子どもの発達段階と外国語習得

何歳で来日したか、また子どもの母語能力を十分考慮すること

ウ) 日本語と子どもの母語との類似点

英語やスペイン語といった言語の場合、一部の固有名詞や商品名を除くと、日本語との類似点はきわめて低い。これに対して、韓国から来日した子どもの場合は、語順や助詞など文法面だけではなく、同じ漢字を介した発音上の類似度の高さから、日本語の学習は比較的容易なものとなる。

エ) 生活日本語と学習日本語

外国人児童生徒の多くは、学校で日本人児童生徒と触れ合う中で、大人が驚くような速さで日本語を身につけていく。しかしそれは日常レベルの日本語で、国語や社会等の授業に参加するとなると内容の理解は難しい。・・・日常会話ができても「豆電球と乾電池を使ってはさみが電気を通すかどうか調べてみましょう」といった表現が理解できるとは限らないということである。

オ) 日本語による日本語指導

日本語を教える教師が外国人児童生徒の母語に精通していることはまずないので、媒介語（児童生徒の母語）を使わない直接教授法によることが多い。直接法では、できるだけ具体的な実物、模型、写真、絵カード、VTR等を活用する。

(2) 日本語指導の留意点

ア) 初期指導の際の母語の活用法

教師も日本人児童生徒も、受け入れた外国人児童生徒の母語で挨拶ができるようにするとよい。それによって日本語のわからない外国人児童生徒が感じている不安を多少なりとも取り除くことができる。しかし日本語を指導する教師が外国人児童生徒の母語を多用すると、依頼心が生じることが危惧されるので、必要なものにとどめる配慮がなされなければならない。

イ) 生活に必要な言葉から

文法的なことを中心に文型積み上げ方式で指導するよりも、日常的な学校生活を送る上で重要度の高い表現から教えていくのがよい。また授業で使われる指示表現なども授業の流れを理解させるために早い段階で教えるのが望ましい。

ウ) 遊びや活動を通しての日本語の習得

体育、音楽、図画工作や美術など、教師の指示にしたがって体を動かしながら学習を進める教科を活用して、行動のなかで自然に日本語を習得させる。

エ) 聞く、話す、読む、書くの指導

外国語の習得では、聞く、話す、読む、書くの4技能をバランスよく伸ばしていくのが理想とされている。しかし日本語には漢字があるため、書く技能が負担にならないように考慮する必要がある。漢字で挫折してしまう児童生徒を出さないようにしなければならない。

オ) 音声の指導

外国語の教育では音声指導が重要である。小学校低学年ぐらいまでの児童の場合には、日本語の音声に自然に慣れ親しんでいくことができる。言語学者は一般に8歳～9歳のあたりで境界線が引かれると指摘している。それ以降になると母語の言語が形成されてしまうため、母語の干渉が強くなる傾向がある。

『ようこそ日本の学校へ』は経験上音声指導に関する問題点として次の7つをあげている。将来日本語指導に携わることがありうる学生は、特にこの7つを記憶しておくことが望まれる。

① 母音の/ウ/を発音する時、唇を丸め突き出す傾向が見られる。

② 清音と濁音の混同が見られる。

ぼく→ポク わたし→ワダシ あたたかい→アダダカイ

③ 拍感覚の習得が不十分で、長音、促音、撥音などに問題がある。

こと→コート きて→キッテ せんえん→セネン、センネン

④ 拗音と直音の混同が見られる。

かいしゃ→カイサ ざっし→ジャッシ びょういん→ビオイん

⑤ シとチの混同が見られる。

しちじ→チチジ しんぞう→チンソウ

⑥ ツとチュ、ツとスの混同が見られる。

つづける→チュジュケル つかれる→スカレル、チュカレル

⑦ ハ行の子音を発音しない。

はじめまして→アジメマシテ はな→アナ ほんとう→オントー

(3) 効果的な指導方法の工夫

英語教育では早くから実践されている「入れ替え練習」(substitution drill)を活用することが推奨されている。例としては、タン・タン・タン・タンと手拍子を打ちながら、次のようなやりとりをすることがあげられている。

【例】

教師	「食べた 食べた 何を 食べた」
子どもA	「食べた 食べた チョコを 食べた」
教師	「食べた 食べた どこで 食べた」
子どもB	「食べた 食べた うちで 食べた」
教師	「食べた 食べた いつ 食べた」
子どもC	「食べた 食べた きのう 食べた」
教師	「食べた 食べた だれと 食べた」
子どもD	「食べた 食べた ともだちと 食べた」

外国人児童生徒が円滑に日本の学校になじんでいくのには言葉は最も重要であることは先に述べた。日本人の児童生徒は外国人児童生徒の編入学当初は好奇心から彼らに近づいていく。そのような環境下で、外国人の子どもは大人が考えるよりも容易に日本語を習得していく。しかしここで問題は、外国人児童生徒の日本語能力が上がり、学校に慣れてくるにつれ、日本人児童生徒の彼らに対する興味が薄れ、次第に遠ざかる傾向がある。両者の対立が起きたり、いじめが始まるのもこの時期である。⁽¹⁸⁾「いじめ」は、外国人児童生徒が日本語を理解できるようになったころから始まるため、日本の学校になじんでいくために覚えた日本語が「いじめ」の道具になるという皮肉な結果を招いている。つまりせっかく覚えた言葉が外国人児童生徒を傷つけるのである。

6 Thomson の Words Can Hurt You ⁽¹⁹⁾ から

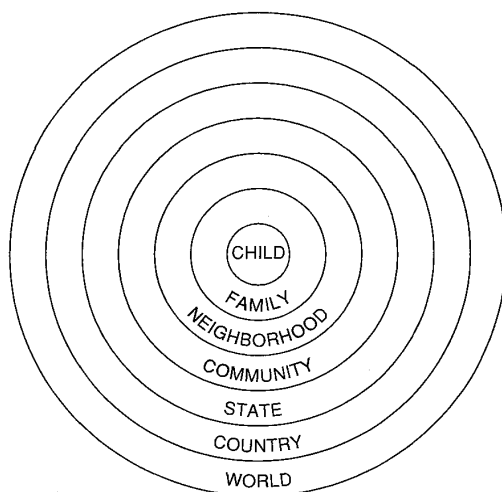
アメリカは多文化社会ではあるが、いまだ多元社会にはなっていない。どの民族集団、どの文化集団に属するかに関係なく、各々の目標達成のために等しく自由に活動できるのが多元社会である。年齢、人種、性別、または障害などによって活動の制限を受けることのない社会である。勿論特定のグループが権力を握って、他を支配するようなことは起こらない。アメリカでは多元社会を目指して新たな法律が作られるべきだとか、あるいは新しい法律を作ってもそれが多元社会を目指す答えになるかなど、今日も議論が続けられている。「積極的是正措置」、教育システムの改革、多文化教育、既存の市民権法の実践等議論の種は尽きない。唯一ついえることは、子どもたちが、自分と同じ人々が存在し、同時に自分とはちがう人々も存在するということを受け入れるだけでなく、自己の置かれている環境が、視野を広げるよい機会として評価できるように教育するこ

との必要性は強調してもし過ぎることはないということである。多様性はアメリカ社会の財産であると子どもたちが思えるように導くのが教育者の使命であろう。そのように教育された子どもは、偏見をもつことによる不快感や自己制限からは自由な大人になることが期待できよう。

「これはなんですか?」、「いくつありますか?」といった質問に答える従来型の言語指導はもはや時代おくれだとThomsonは指摘している。Thomsonの主張によれば、「棒切れや石は、わたしの足を折るけれど、言葉が私を傷つけることはない」という古い子どもの歌ほど現実から遊離したものはない。⁽²⁰⁾ 言葉こそ人を傷つけるのである。言葉に対して敏感になることは、人の一生をかけて学んでいかなければならないほど重要な事柄である。したがって子どもを教える教師自身が偏見から自由な人間であるか否か自己点検をすることが求められる。教師はほとんど無意識に「男子生徒は、学校の建物に入ったら、帽子を脱ぎなさい」と教えるが、これはあくまでもアングロ・サクソンの習慣で、帽子をかぶっていなければならない習慣をもつ民族もいるという知識をもっていない。他にもこのような例は多々あるだろう。⁽²¹⁾ 常に帽子を被っている習慣をもつ民族の子どもは、教師のこの一言によって傷つくかもしれない。偏見あるいは差別するような言葉は言語教育（この場合英語）のなかだけで教えるのではなく、あらゆる教科、あるいは児童生徒の日常行動のなかでも注意深く観察・指導していかなければならない。Thomsonは指導の例として次のような場面を上げている。校庭で遊んでいた一人の子どもが押し倒されて泣いている。他の一人は「弱虫、馬鹿」と悪口をいわれて泣いている。教師はどちらを先に慰めるべきかをクラスに問う。様々な意見が子どもたちから出された後、教師は先に述べた「棒切れや石は私の足の骨を折るけれど、言葉は私を傷つけることはない」という歌について、これに生徒が賛成かどうかを考えさせる。⁽²²⁾ ここで注意しなければならないのは、ただちに正しい答えに到達しなければならないということではない。答えは学びながら習得していくものである。⁽²³⁾

偏見から自由な人間になるためのカリキュラムの組み立て方としてThomsonは子どもを中心に置いた同心円を用いる。まず自分を中心に、家族、近所、近隣、コミュニティ、州、国、世界へと視野を広げ、そこにどんな偏見が存在するのかを考えていく方法をとることを提唱している。⁽²⁴⁾ 教師はランダムに偏見について語るのではなく、子どもが行き着くべき世界を常に視野に入れつつ指導をしていかなければならない。日本の学校で行われている「総合的な学習」の時間に外国人に来てもらって話を聞いたり、外国のことを子どもに調べさせたりすることが無意味というわけではないが、多くて1週間に一度、少なければ1ヶ月に一度ではとても十分とはいえないことをThomsonの教育法は示唆している。

Thomsonの世界観の形成



7 宗教教育(1)—StullのMulticultural Discovery Activities for the Elementary Grad⁽²⁵⁾から

日本は宗教に関しては極めて寛容な国である。しかしこれは裏を返せば無関心、さらには無神経とみなされる場合もあるだろう。したがって宗教教育に関しては、多文化国家の先達の研究に学ぶのがよいであろう。Stullの宗教教育は大変慎重である。いきなり宗教をテーマにせずに、様々な文化的背景をもつ人々の祝い事、お祭りを学ぶところから始める。世界には様々な人々がいて、それぞれが自分とは異なる価値観をもって生きていることを認識させ、さらに自分とは異なる事柄を尊重するように児童生徒を導いていく。祝い事やお祭りのとき特別な食べ物を食す経験も盛り込まれている。

8 宗教教育(2)—ElderとCarrのWorldways⁽²⁶⁾から

K-12の上級の教育を想定しているためか、Stullよりももう一步踏み込んで宗教に言及している。⁽²⁷⁾ 教師は、すべての宗教に対して客観的な立場をとるように注意を喚起している。導入として次の点を考えさせる。1) 宗教は人々の生活でどのような役割をしているか。2) どのように、またなぜ多くの宗教があり、それぞれが異なるのか。3) 信者数の多い宗教は、国際問題に対してどのような役割を果たしているか。コミュニティー内の宗教指導者を招いて話を聞くことを活動の中心に据えているが、招く際の人選にも十分配慮することが必要であろう。最終的に生徒をどこに着地させるかだが、生徒はまず世界で信者数の多い宗教と、自分の居住する地域の信者数とを比較する。その上で、様々な宗教の信者がどのような理由で、どのような方法で衝突を繰り返しているかを考えさせる。宗教による衝突の歴史に関するレポートを書かせ、後知恵になるが、どうしたら衝突が防げたかについても考えさせる。宗教にさして関心のない社会に生きている日本の児童生徒にこのような教育をするのは至難のことであろう。しかしこのまま

少子・高齢化が進み、多数の移民を受け入れざるを得なくなったときには避けては通れない問題であることを認識しておくことは重要である。

宗教と呼ぶには問題のあるものもあるが、Elderは世界の主な「宗教」として、1) 仏教、2) キリスト教、3) 儒教、4) ヒンズー教、5) イスラム教、6) ユダヤ教、7) 神道、8) 道教をあげている。さらにそれぞれに関して以下のことを調べる課題を提示している。1) 信教および戒律、2) 聖典、3) 主たる祈りの言葉、4) 礼拝する場所、5) 聖なる日、祝い事、祭り、6) 親睦団体および世界規模の相互援助プロジェクト。

9 CechのGlobal Child: Multicultural Resources for Young Children⁽²⁸⁾ から

CechもStullと同じく、宗教には直接触れず、世界の様々な民族が祭りごとを導入として用いている。Cechは収穫をどのように祝っているかに注目しているが、多くの場合収穫の祭りには宗教的な意味が込められていることに気づくよう導いている。また祭りの際にどのような服装をするのかを、紙人形を製作することで、異文化に対する子どもの認識を定着させることを試みている。またCechのもうひとつの特徴は、地図の多用である。民族について学ぶとき、その民族が世界のどこに位置しているのかを学ばせ、子どもが「自民族中心主義」(この場合アメリカ)に陥らないように指導していることがCechの教科書全体から見てとれる。

10 日系ブラジル人の問題

異文化接触という観点から、現在最も注目され、また研究の対象として多く取り上げられているのが日系ブラジル人(ペルー等南米諸国も含む)である。⁽²⁹⁾ 現在のところニューカマーで、集住してコミュニティをつくっているのは日系ブラジル人だが、合計特殊出生率が1.25にまで下がり、これが上がることは期待できない状況を考えれば、将来は日系ブラジル人だけでなく、諸外国から移民が流入してくることが十分予測される。日系ブラジル人の例からもわかるように、流入してきた移民は帰国せずに日本に定住する傾向が強いこと、また定住に関しては。ドイツのトルコ人ゲスト・アルバイターが最も顕著な例であることは先に述べた。

日本ではたとえ日本国籍を取得しても、血統と文化と言語が分かちがたく結びついていて、この三要素を満たしていなければ日本人とはみなされないのが現実である。三要素のなかでも血統は特に重視される。したがって日系ブラジル人は、長い間固く信じられてきた日本人の定義を揺るがす、好ましからざる存在ということになる。さらには彼らは、真性「日本人」によって、南アメリカの貧困と後進性も手伝って、一段と劣った存在として位置づけられる傾向がある。⁽³⁰⁾ これは北アメリカの日系人には適用されない日本人のメンタリティーである。日本人が日系ブラジル人をこのように受け止めている

かぎり、真の共生は望むべくもない。

日系ブラジル人に自由就労ができる在留資格が与えられたことは、日本政府がそれを望んではいなかったにせよ、日本が多文化社会に移行できるのか否かのテストケースになったと見ることができよう。ともかくも日系人に特別の在留資格を許可したことは、日本人の血を引き、日本語は話せないまでも、多少なりとも日本的なものに接したことのある彼らならば比較的たやすく日本社会に溶け込むことができるだろうとの読みが甘かったことは否めない。当初予測したほどスムーズではなかったとはいえ、あからさまな差別やいじめが日常的に起こっているという報告はない。逆に日系ブラジル人の生活環境は10年前と比較してはるかによくなっているという報告もある。⁽³¹⁾

11 大泉町の場合

大泉町は日本における最もブラジルの町といわれている。⁽³²⁾ 中小企業数は約200、町自体は、富士重工と三洋電機という大企業の工場がある一面、日本のどこにでもある外国人労働者に依存した下請け専門の中小企業地域でもある。大泉町が最もブラジルのといわれる根拠は、日本人住民との比率においてである。42,000の人口のうち、外国人が14.8%を占め、このうち日系ブラジル人は10%を超え、日本最高の外国人密度であると同時に、日系ブラジル人密度である。この数字は常に流動的で、日本経済の地殻変動につれて上下してきたし、これからもするだろう。⁽³³⁾ しかし大泉町と「サンバの町」とはすでに切り離せないほどに密着している。大泉町が最初からこのようであったわけではない。人手不足に悩む中小企業経営者たちが合法的に雇える日系人を求めて「東毛地区雇用安定促進協議会」を結成し、町ぐるみの外国人労働者受け入れ態勢を作り上げたところから始まる。⁽³⁴⁾ 大泉町の特徴は、単に積極的に日系ブラジル人を受け入れただけでなく、「家族ずれ」を歓迎したことにある。⁽³⁵⁾ 住環境も、上記協議会主導によって「アパート6畳には二人まで」、「冷蔵庫、エアコンは備え付ける」ことが実践されて快適になり、子どもがいる家族が住めるようになった。⁽³⁶⁾ その結果大泉町は日系人だけでなく、他の外国人にとっても住みやすい町になり、働くのは他の市や町だが、居住には大泉町を選ぶものが増えている。⁽³⁶⁾ 町の中心にはイラン・レストランもできている。⁽³⁷⁾

大泉町の場合も、豊橋市や豊田市など他の日系ブラジル人集住地区が抱える問題から自由であるわけではない。外国人の定住が長引くにつれて、地元住民からの苦情が絶えなくなっている。共生していくにおいて、ゴミ出しなど日常の問題もあるが、最大の課題は犯罪件数の増加である。大泉署の留置場の8割がブラジル人で埋まったこともあるという。犯罪の多くは麻薬がらみであることも、地元住民が憂慮するところである。⁽³⁸⁾ その結果、真の国際都市として共生していくよりも、住み分けが進むことになる。

むすびにかえて

大泉町は、町中にポルトガル語の看板があり、カトリック教会が目につくという一点においても、なんの変哲もない田舎町とはいえない。しかしこの印象だけで大泉町をとらえるのは正しくないだろう。戦前、大泉町には中島飛行機の工場があった。町には地元外から多くの日本人が入り、また朝鮮半島や台湾からも労働者が徴用されてきて働いた。戦後はこの工場の跡地に米軍の基地ができ、アメリカ人がやってきた。基地が閉鎖された跡地には富士重工の工場が建設され、関西系の三洋電機もこの町に工場を建設した。雇用の機会が増えると、法律の改定で、日本で自由に就労することが可能になった日系ブラジル人らがやってきて今日にいたる。町民は「よそ者」や外国人に対して他の町村の人々よりも免疫があるはずである。⁽³⁹⁾ 大泉町の政策は外国人に開かれた町で、特に日系ブラジル人に対しては歓迎の姿勢を示している。「国際都市」大泉町は、今や日本全国に知られ、「国際化」のモデル都市としても知られている。しかし大泉町内の2ヶ所のコンビニエンス・ストアで、学生と同年代の店員にインタビューを試みたところ、日系ブラジル人に対してほとんど関心をもっていないことに驚かされた。町の中心街には多くのブラジル・レストランや商店があるが、足を踏み入れたことはないという。気になったのは、彼らが終始嘲笑ともとれる笑い方をしながら質問に応じていたことである。

町役場が運営する「文化村」は、日本文化を外国人に伝えることが目的のもので、外国文化を、特にブラジル文化を日本人に伝えることは運営の意識下になくことがわかる。「国際都市」のモデルといわれている大泉町にして、双方向の交流・共生からはほど遠いという印象を受けた。日系ブラジル人の側がなんの努力もしていないということではない。名古屋の例だが、日本人との交流を目指して、サッカーや、サンバ、さらにブラジルの海岸の美しさなどを伝えようとイベントを試みたが、日本人はブラジルの文化には興味を示さず、その口から出てきたのは、「ゴミ出し、騒音」に関する苦情だけで落胆させられたということも報告されている。⁽⁴⁰⁾

日系ブラジル人の人口が増えると、彼らの日本人、日本社会に対する関心が薄れ、超然とした姿勢をとるようになり、母国のライフスタイルを持ち込み、町が西欧化されていく。日本人の側は、自分たちがまるで外国にいるような気分になってくるといふ。カルヴァルホ (Carvalho) が主張しているように、日本に新たなマイノリティー社会ができる過程の例を大泉町に見ることができるというてよいであろう。⁽⁴¹⁾

近年もっと外国人労働者を受け入れるかどうかの議論がさかんになされている。少子高齢化で、働き手の不足が予測されることを考えると当然のことともいえる。2030年の労働人口は、今より1,000万人も減り、女性や高齢者が現在以上に働くようになったとしても500万人以上減ると国は推計している。2004年5月の内閣府による世論調査によると、

日本の労働力が不足した場合の外国人の受け入れに対して、積極的に考えていく（15.3%）に、やむを得ない（45.0%）を加えると、半分以上の人々が受け入れの姿勢を示している。

⁽⁴²⁾ それにもかかわらず、いまだに日本政府には「包括的」な移民政策がない。⁽⁴³⁾

将来職場で外国人の子ども、その親と接触する可能性が大いにある学生にはこれまで記してきたことを理解させておく必要がある。その上で、常に子どもの背後にある文化を理解し、受け入れる姿勢をもつことを心がける必要があろう。人は外国に出たときに、自分の母国を知ってもらいたい、愛してもらいたいという強く思うものであるということをよく理解している必要があるだろう。⁽⁴⁴⁾ 世の中の状況がどうであれ、教師を目指す学生は現在も将来も、外国人と日本社会とをブリッジする存在であってほしいし、日本語で苦戦している人がいたらボランティア精神で援助できるような存在であることを願ってこの論文のむすびとしたい。

- (1) Newsweek, August 6, 2003, p.26.
- (2) 平成17年度佐倉市の外国人定住者数は1,054人だったが、18年には1,780人に増加している。外国籍の児童は45名（平成18年4月18日佐倉市市役所調べ）。
- (3) 「朝日新聞」, 2005年12月23日, p.1。
- (4) 石川達三, 「蒼氓」, 埼玉福祉会, 2001年, p.6。
- (5) 大宮知信, 「デカセギ：逆流する日系ブラジル人」, 草思社, 1997年, pp.90～91。
- (6) 西田ひろ子編, 「異文化間コミュニケーション摩擦」, 創元社, 2003年, p.16 & 25。
- (7) 同上, p.21。
- (8) 小内透・酒井恵真編著「日系ブラジル人の定住化と地域社会」, 御茶の水書房, p.6。
- (9) 喜多川豊宇（1993年）『浜松市における外国人の生活実態・意識調査：日系ブラジル・ペルー人を中心に』, 委託調査報告書, 浜松市企画部国際交流室
喜多川豊宇（1995年）「日系ブラジル人労働者家族の定住化に関する調査研究：生活構造, 意識の変動を中心に」, 『平成6年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書』
- (10) 西田, 前掲書, pp.30～47。
- (11) 太田晴雄, 「ニューカマーの子どもと日本の学校」, 国際書院, 2000年。
- (12) 同上, p.39。T市の場合1989年から1992年にかけて急増している。
- (13) 同上, p.24。
- (14) 同上, pp.25～26。
- (15) 文部省 [著], 平成7年。

第1章 外国人児童生徒に対する教育の考え方

第2章 外国人児童の受け入れ

第3章 日本語指導

第4章 学習指導

第5章 教育相談・進路指導

第6章 外国人児童生徒と共に学ぶ国際理解教育の推進

- (16) 同上, 付3～付8.
- (17) 同上, p.22.
- (18) 同上, p.6.
- (19) Thomson, Barbara J. *Words Can Hurt You*, Addison-Wesley Publishing Company, Inc. (Menlo Park, California: 1993) .
- (20) *ibid.*, p.13.
- (21) *ibid.*, p.9.
- (22) *ibid.*, p.77.
- (23) *ibid.*, p.37.
- (24) *ibid.*, p.40.
- (25) Stull, Elizabeth Crosby. *Multicultural Discovery Activities for the Elementary Grade*, *The Center for Applied Research in Education* (West Nyack, New York : 1995) . Stullの宗教に関する記述は, アジア, アフリカも丁寧にカバーしてはいるが, 元日をGenjitsuとするなど, 他の言語に関しても精査すると間違いがあるのではないかと危惧する。
- (26) Elder, Pamela and Mary Ann Carr. *Worldways: Bringing he World into the Class-room*, Addison-Wesley Publishing Company, Inc. (Menlo Park, California: 1987) .
- (27) *ibid.*, p.96.
- (28) Cech, Maureen. *Globalchild: Multicultural Resources for Young Children*, Addison-Wesley Publishing Company (Menlo Park, California: 1991).
- (29) 小内透・酒井恵真編著, 「日系ブラジル人の定住化と地域社会」, 御茶の水書房, 2001年, pp.i～iv.
- (30) Roger Goodman & others edt. Daniela de Carvalho, 13 Nikkei communities in Japan, *Global Japan: The experience of Japan's new immigrant and overseas communities*, Routledge Curzon, Taylor and Francis Group (London: 2003), pp.196-197.
- (31) *ibid.*, pp.198-199.

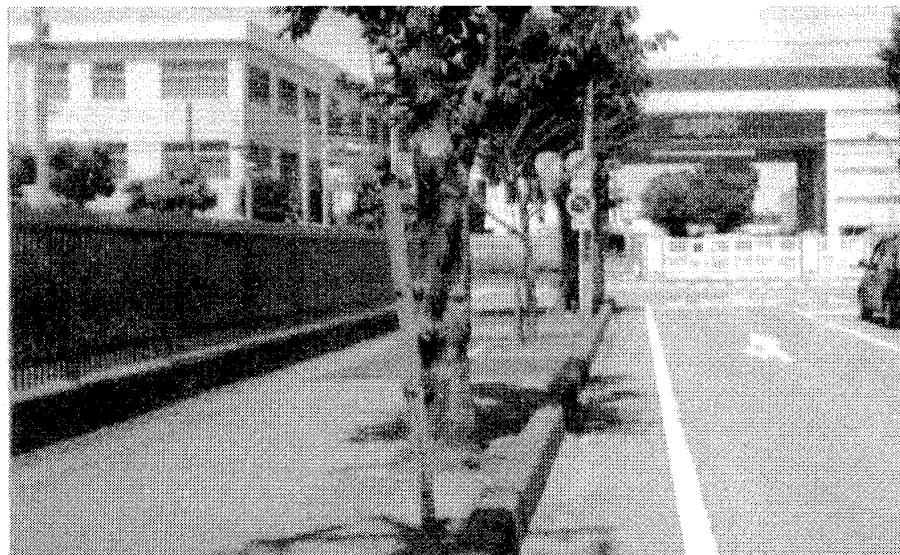
- (32) *ibid.*, p.199.
- (33) 「ニッケイ新聞」, 2006年7月4日 (<http://www.nikkeishimbun.com.br/021120-62colonia.html>)
- (34) 上毛新聞社, 「サンバの町から：外国人と共に生きる－「群馬・大泉」, 1997, p.2.
- (35) 同上, p.14.
- (36) 同上, p.24.
- (36) 同上, p.79.
- (37) 同上, Appendix.
- (38) 「ニッケイ新聞」, 2006年7月5日
<http://www.nikkeishimbun.com.br/021123-62colonia.html>, p.1.
- (39) 上毛新聞社, *ibid.*, pp.29-42.
- (40) *Newsweek*, September 11,2006, p.23.
- (41) Carvalho, Daniel, *op.cit.*, p.201.
- (42) 「朝日新聞」, 2006年9月3日 (朝刊), p.3.
- (43) *Newsweek*, September 11,2006, p.23.
- (44) 米原万里著「嘘つきアーニャの真っ赤な真実」, 角川文庫, 2006年, p.193.



(1) なんの変哲もない
田舎町の駅



(2) 町の案内図は日本
語とポルトガル語
のバイリンガル。



(3) 三洋電機のある静
かでこぎれいな通
り。



(4) 大泉町役場。ISO
の認証を受けたこ
とを示す垂れ幕。



(5) 三洋電機，富士重
工，日系ポルトガル
人のための役場か
ら羽田行きの直行
バス乗り場。



(6) いたるところにある
ポルトガル・レストラ
ンのメニュー。金曜
日の夜から日曜に
かけてブラジル名物
の串焼き肉「シュラ
スコ」目当ての客で
賑わう。日本人の
客はほとんどなし。



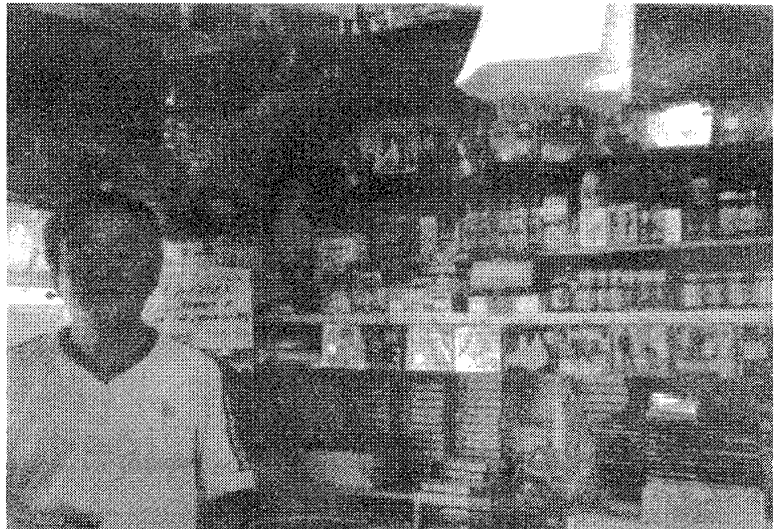
(7) 駅前のポルトガル雑貨店。



(8) 店内には食料品から新聞、雑誌、CD
ビデオなどが雑然と並ぶ。



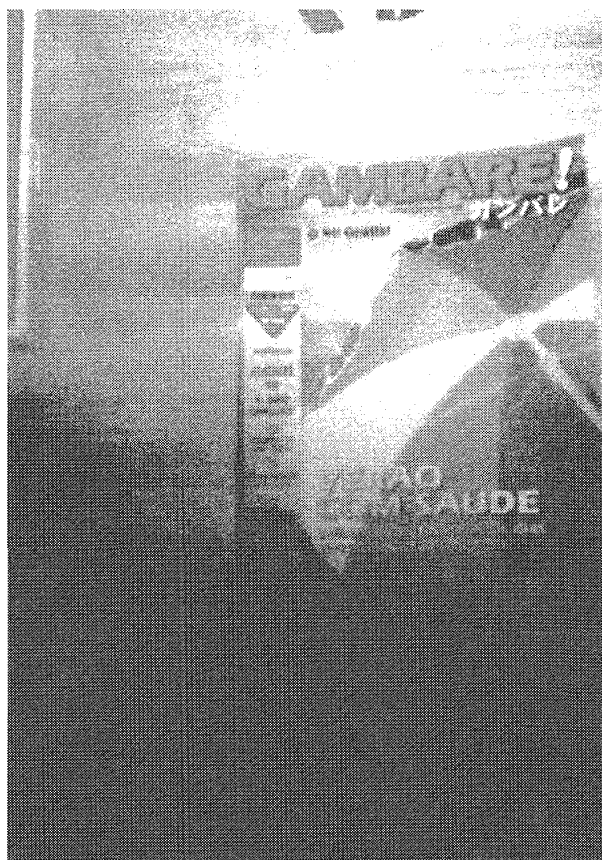
(9) 瓶詰めの食料品の棚。



(10) 店主は沖縄からブラジルに移民。40
年後日本に「逆流」してきた日系
二世。日本語は流暢。



(11) 町のいたるところにあるカトリック教会。



(12) ポルトガル語就職情報誌「Gambare」。